パーソナリティを考える

—— 二段階の接近法の試論 ——

東北大学名誉教授 北 村 晴 朗

Consideration on Personality A proposal concerning the methodology of personality study

Seiro Kitamura (*Tohoku University*)

A new methodology for psychological study of personality is proposed in this paper based on review of mutually opposing propositions on psychology of personality. Mainly through the review of Mischel's theory, several findings described below were identified. First, individual variables are already existing within each person prior to the formation of what he calls the person variables. Second, the situation should be defined not as the environment external to the person but as the entity formed via functional relationship with the internal variables. Third, his terminology "interaction" should be restricted to imply the interaction between his/her behavior and the other persons. On the basis of these recognitions, it is proposed that the study of personality should be conducted as the two-step study. The first-step study should be focused on the clarification of the basic total situation of the subject. Then in the second step, the individual characteristics of the subject's behavior in each situation should be investigated. Furthermore, it is suggested that the behavior to be studied should be of episode-type, and that the episodes be sampled from the attitudes of the subject to the other persons, to the life activities, and to oneself including self-conceptions.

Key words : personality methodology, person variable, person vs. situation, interaction, episode.

パーソナリティ・個性・性格

(1) パーソナリティは個人の行動や態度・感じ方や考え方などに、ある程度一貫した独自性が認められるという経験にもとづいて構成された概念である。それは個人に他の人とは違う独特の行動の仕方を一貫的に生じさせる内的な体制である。人との付き合いや話し合いにおいて、相手の気性や性分、人柄とか性格とか気立てを多少とも考慮に入れない人はほとんどないであろう。相手の年齢や性別や社会的な地位などとならんで、こうした性格的な特性を考え、それに基づいて反応の仕方を予測しながら対応するのが普通である。

この場合、相手が想定されたパーソナリティか

ら予想されるような行動を示せば、その人らしい振舞と考え、予想外の行動を示せば、意外な行動という印象をもつ。われわれはそのような経験によって相手について想定されたパーソナリティ像を確かめたり、補正したり、あるいは再編成したりし、ときには了解不能の人と見なすのである。

このように想定されるパーソナリティは一般に主観的で暫定的なもので、その意味内容も不明確であるが、心理学は確実な資料と考察によって、客観的なパーソナリティの知識を確立し、個々のパーソナリティを見出す方法や手続きを手に入れようとするものである。

パーソナリティは人格と訳すことができるが、「人格」は多義的で、道徳的価値や主体という意味も

含まれるので、パーソナリティをそのまま心理学の用語として用いる例が多い。

(2) パーソナリティをなお明らかにするために個性について述べておきたい。個性とは個々の生きものの独自の特殊性をつくっている諸特徴の全体であり、人間の場合はその人のパーソナリティに現われていると考えられる。individual は分割すればその本性を失うものとして生きものが意味されるが、人間の場合、その個性はとくに重要な意義をもつと考えられる。

個性とパーソナリティとの違いを述べれば、パーソナリティは、個人が成長発達につれて形成された内的体制であるが、個性は、それ以前にもパーソナリティの素地または素材として存在し、それが形成された後にもその基盤として、その安定性を支えたり、再編成を促したり、あるいは内的動揺のもとにもなるものである。その意味で個性はパーソナリティの土壌であり、可能態であり、パーソナリティはその現実態であるといえる。パーソナリティは測定され、検査されるものであるが、個性はむしろ発見され、推定され、仮定されるものである(北村 1983)。

個性のある側面は、危機的な場面など、本人や環境の極端な変化にあたってはじめて姿を現わし、その人柄を知っていると思う人にも驚きを感じさせることがある。このような場合、われわれが想定していたパーソナリティは見直しや変更を求められるが、個性そのものが変ったのではなく、個性としてすでに存在していたものが特殊な場面ではじめて姿をあらわしたのである。

個性はまた遺伝的な素因としての素質と同じものではない。素質はいわば種子であって、生後の経験によって変ることではない。個性は、素質が開発的刺激や阻止条件によって、開発されたり、助成されたり、阻止されたり、歪められたりして成り立った可能態であり、潜在的ではあるが、いつでも現実態として顕現しうるものである。

(3) 性格(character)とパーソナリティとは、語源では異なるが、今日の心理学ではほぼ同じ意味のものである。歴史的経過から言えば、性格を対象とする性格学は比較的に早くドイツを中心とし

て発達し、パーソナリティの心理学はアメリカ合衆国に生まれ発達したものである。しかし今日ではドイツにおいても *Persönlichkeit* という用語が一般化していると思われる。しかし強いてその違いを言えば、性格では、安定した構造をもつ全体的な特徴が強調され、パーソナリティでは、その形成の経過と部分的な特徴が注目される。性格では、固有の傾向性が重視される反面、形成の経過や変化の可能性が軽視されがちであり、パーソナリティでは、人の発達の過程で形成される暫定的な態度や習慣までが特性とみられ、そのためにパーソナリティの一貫性が疑問となる場合もないではない。

性格の素材の一つとみられるのは、気質(temperament)である。それは刺激や周囲の世界に対する感情的反応に見られる個人的な傾向である。それは、遺伝的・体質的構造に依存するものと想定され、ごく幼い時期から姿を現わすものと見られる。

パーソナリティ心理学における対立的な考え方

心理学には、多くの対立的な考え方とそれをめぐる論争があり、ときには学ぶ者に困惑を感じさせるが、その論争によって心理学が活性化させられ、発展させられてきたことも見のがせない。パーソナリティの心理学でも、幾組かの対立的な考え方があるので、その主要なものを吟味して、パーソナリティを考えるための出発点としたい。

(1) 法則定立的と個性記述的

Windelband (1894) は、経験科学には、二つの種類があり、一つは法則の形をとる普遍的な知識を求める科学であり、もう一つは歴史的に規定された形態をもつ特殊なもの・一回的なものを明らかにする科学であるとした。前者は自然科学で代表される法則定立的な科学であり、後者は個性記述的な科学であって、歴史学がその代表である。彼はこれによって、歴史学をはじめ特殊的・個性的な事象の科学的な研究の意義を明らかにしようとしたものである。

Windelband は、心理学を法則定立的な自然科

学に属するものとしたが、後にパーソナリティの心理学では、さらに個性記述的な研究が必要であり、重要であることを強調したのが Allport (1937) である。彼はパーソナリティの心理学でも、法則定立的な研究が多く、個人の性格を明らかにする個性記述的な研究が少ないことを遺憾とし、この側面の研究を推進しようとした。

Allport (1961) は後に、法則定立的の代りに次元的、個性記述的よりは形態形成的という用語が適切と考え、形態形成的な方法を追究した。この方法がどのようなものであるかについては、Allport らの努力にもかかわらず、必ずしも明確に示されていないが、しかし、法則定立的または次元的方法に対して個性記述的な方法の重要性を強調した意義は大きく、その後この二つの方法の優劣や関係をめぐる論争は今も続いているのである。

パーソナリティの構造や形成について一般的に妥当する知識を求めることやパーソナリティのある次元や特性について追究することには十分意義あることである。またその特性に支配される行動の予測にも役立つであろう。しかし、ある個人について一つの特性あるいは、いくつかの特性を検査・測定しても、その人のパーソナリティを明らかにしたとは必ずしも言えない。たとえば、次元的方法によって、一つあるいは二、三の特性についての測定の結果が得られても、個性記述的な情報がなければ、その測定値がパーソナリティのなかでどんな意義をもつかがわからないからである。ある測定値は統計的な意味をもつが、個体についての適切な情報を与えるとは限らないのである。

しかし、また、信頼のできる個性記述を行うためには、次元的研究の提供する知識を活用することは、きわめて有用なことである。

(2) Leibniz 的な考え方と Locke 的な考え方

Allport (1959) は、パーソナリティの心理学には Leibniz の流れをひくヨーロッパの系統と Locke の流れに従うアメリカの系統とがあると考え、その統合あるいは総合の必要性を説いた。

Leibniz の伝統とは、彼の有名な単子論に見られる人間観に従う考え方である (河野 1951)。単子 (monades) はそれ自身で存在するもっとも単純な

実体で、部分をもたず、増減することもなく、何かが入出するための窓も持たない。単子はそれぞれ独自の性質をもつ個性的実体で、それぞれの仕方宇宙をうつし出し表現するものである。

単子は変化するが、それは内に含まれるものを表現することによる変化であり、個体化または、自己実現的な変化である。単子はこのように自己を表現する欲求をもつ。自己を実現し完成してゆく力が明確なのは、生物の単子であるが、そのうえに記憶をもつのが動物の単子で、さらに理性と知識をもち自己と神とを知るのが人間の単子である。動物や人間は自己を表現し実現する用具として身体をもつが、それは無数の単子から合成され、どんな機械よりも無限にすぐれたものである。

Leibniz はこのように、人間が個性的単子に内在するものの自己実現としての発展的变化をするものと考えた。Allport はこの考え方でパーソナリティの発達や形成をとらえようとする傾向がアメリカよりも西欧に有力であると見たのである。

一方の John Locke はよく知られているように、人間の心は、固有の性質をもたない白紙のようなもので、生後の経験次第でさまざまな姿に形成されると考える。人間を特徴づける知性の内容となるのは、延長、形、運動・静止などと、色、音、におい、寒暖などの観念 (ideas) であるが、それらすべては、感覚とその内観によって得られたもので、したがって人間の知性には生得的なものは何一つないと説くのである。「はじめ感覚のなかになかったものは、知性のなかには存在しない」というこの経験論の主張をパーソナリティの形成にも移して考えるのが、アメリカに有力な傾向だと Allport は言うのである。

上の命題に対しては Leibniz は全面的に反対するのではなく、「知性そのものを除いては」を補足することによって、自分の主張を擁護した。Leibniz も人間や動物が世界の中に住むこと、盲人には赤という感覚を説明することができないことを語っているので、感覚の影響を認めているが、それでも人間は、経験のあり方によって、光を光以外のものとは見ることをできないことを強調するのである。

Locke と Leibniz との間に全面的な対立がある
と考えるのは適当ではないであろう。単子にどれ
ほどの可能性があっても、それを開発する外的な
環境や刺激がなければ、それは発芽できない種子
の状態にとどまり、逆にどのように好ましい環境
があり、刺激が与えられてもそれにより発芽し展
開する種子がなければ、何も現われはしないから
である。

しかしパーソナリティの考察においては、Locke
的な考え方と Leibniz 的な考え方との対立や論争
がすでに終息をつげたわけではない。遺伝と環境
との関係の問題もまったく決着がついたわけでは
なく、今日では、「人か状況か」をめぐる活発な
論議が続いているのである。これについては、つ
ぎの章でくわしく検討する。

トーマ (1955) はかつて、人間をその生涯にわた
る過程を通してとらえる立場をとれば、経過とし
てのパーソナリティと構造としてのパーソナリティ
とにわけて取扱う必要があることを説いた。構造
としてのパーソナリティでは、基本的な活動性、
心の諸層、生存の主題と技術と性格特性をとりあ
げ、経過としてのパーソナリティでは、状況への
対応や刻印づけを含む社会化の過程で形成される
ものを取りあげた。この考え方は、ある意味で
Leibniz 的な方向と Locke 的な方向とを、ともに
考慮に入れたものとみられる。

(3) パーソナリティへの接近法の問題

パーソナリティを研究する具体的な方法や技法
はきわめて多彩であるが、その根本にある基本的
な考え方における選択項についても一通り触れて
おきたい。

① 歴史的接近法と力学的接近法

これは Lewin (1935) が注目した問題点で、ある
行動やその傾向を本人の過去の経験にもとづいて
解釈する歴史的接近法と現在の時点においてその
行動や特性を支えている生活空間の力学的構造か
ら説明する力学的接近法との優劣を問うものであ
る。

ある行動が行われるのは、過去の経験の影響は
あるにしても、過去の力が今に及ぶことはないの
で、もっぱら現在の生活空間内の力学的構造によ

ると考えるのである。たしかに、ある異常行動を
幼児の外傷経験によると解釈しても、何故に今の
時点で生じるかということは、今の生活空間の構
造からしか説明できないのである。しかしながら
その生活空間は時間的経過のなかに発生し発達し
て今日の姿になったので、その過去の経験的事実
を知らなければ、その構造も知られないのである。
上の両接近法はむしろ補完的なものである。

② 了解的接近法と因果的接近法

この2つの接近法の差異を説いたのは、自然は
因果的に説明され、心的生活は追体験的に了解さ
れると考えた W. Dilthey であるが、ここではそ
の趣旨を明晰に整理した Jaspers (1948) に従っ
て述べたい。

ある行動がどうして生じたかを知るには2つの
筋道がある。一つは因果の連関または脈絡による
道であり、もう一つは了解のそれによる道である。
了解的な連関とは、ある行動がある心的事象から
生じたことが自明的に理解されるとき脈絡である。
ある人が人間不信に陥っているのは、かつて
深く信じていた人に裏切られたからと知って、な
るほどその心理がわかるような場合である。

因果的な連関は、反復された経験によって、あ
る行動や心的事象が、心以外の物的な事象または
機制から生じることが帰納的に説明されるとき
脈絡である。ある行動が脳神経系のある部位の作
用とか外からの刺激の影響によると説明されるよ
うな場合である。

自明的に了解される脈絡をこえて、ある行動が
別の心的経験から生じたと考える場合は、了解で
はなく、解釈である。Jaspers はこの意味で神経
症患者の異常行動についての Freud の説明は了解
ではなく「かのような了解」であると考えた。こ
の場合、もしある解釈が、くりかえし確かめられ
るならば、そこに一種の心理学的連関が認められ
ることになるであろう。

因果的連関と了解的連関とは、同一の行動の解
明にともに役立つことが少なくない。ある青年の
特定の異性に対する行動は、ホルモンや環境の影
響から説明できる部分もあり、特殊な対人的な経
験からの影響として了解される部分もあり、両者

は補完的に役立つのである。

了解連関を中心におくパーソナリティの研究は必ずしも多くはないが、外見上はそれを外れた研究でもその発端と結末の段階では、了解や解釈が大きな役割を演じている場合が少なくない。たとえば、ある特性を測定するための尺度や質問紙の項目を選定する際には、了解連関あるいは、解釈的連関から得られた知識が大きく物を言う。また因子分析の終りの段階で抽出された項目群に命名する際にも、しばしば了解または解釈を頼りとするのである。しかもそれらの全項目が妥当であるか、課題を解明するに十分なほど包括的であるかどうか、主要な因子群の命名が妥当であるか、他の因子群の命名との関係に斉合性があるかどうかなどについての吟味はほとんど行われない場合も少なくないのである。この意味で了解や解釈についての十分な検討はつねに必要なのである。ときには、研究のはじめの段階で問題そのものを歪めたり、結論の段階で結果をゆがめたりする危険さえあるからである。

つぎに、了解的接近法と因果的接近法との関係に近似するものに、個人的内的接近法と一般的外的接近法との対比がある (Snygg and Combs 1949)。前者は、人の行動や意識体験をその本人の状況に身を移して、その人の認知の仕方に即して理解し、また予測しようとするものである。後者はその人の行動などを、外からの観察者の立場から明らかにしようとするものである。この第二の接近法は、個人の行動を一般的または平均的あるいは最頻的な行動との比較で処理し、説明するもので、個人の独自性・特殊性をとらえるには適切ではない。この接近法も幼児など自分の内的事情を語ることでできない対象については有効であるが、その場合も、その子の想定される内的世界に多少とも身を移さなければ、その行動さえも知ることはできないであろう。他方、個人的内的接近法も、他の人々の行動についての観察資料との比較検討を欠いては客観的な知識とはならないであろう。この意味で上の両接近法も補完的な役割をになうものと言える。

③ 部分追求か全体追求か

この対立は、今のところ顕在的論点とはなっていないが、潜在的には見逃しえない問題である。実証的なパーソナリティ研究では、ほとんどすべてがその部分またはある側面を対象とするものであり、実際また Jaspers (後述) が指摘するように、人間または個人につきその全体を明らかにすることは、本来的に不可能であることは、はじめに承認しておかねばならない。しかしながら、パーソナリティの研究では、それがたんなる部分的な追求にとどまるのか、全体像を志向するものかは重要な問題である。というのは、パーソナリティとは、個人の全体的な特徴であり、その部分的な特徴だけをあげただけでは、その全体の姿を歪めてとらえる危険がきわめて大きいからである。ある次元における一つの特性を明らかにしたように見える研究でも、それがその人のパーソナリティの全体のなかのどんな部分を示しているか、どんな意義をもつかについての視点を欠いては正しい知識とはならない。全体にまでは迫れないにしても、他の特性についての情報を加えただけでも、その知識は価値を増すのである。ある人を内向的な人とか躁鬱的な気質の人であるとか確かめたとしても、それが他の傾向性とう関係するか、それがその生活活動でどんな意義をもっているかなどを明らかにしなければ、その人の部分的または表面的な理解にとどまり、その人の誤った解釈にも導くのである。

以上、パーソナリティの研究にみられるいくつかの二者択一的な考え方も実は互いに補完的な意味をもつことを示したが、今日もっとも大きい論題は、「人か状況か」またその相互作用に関する問題である。つぎにこの論点について検討に入ることにはしたい。

人か状況かの論点をめぐって

(1) Mischel の問題提起

以上の問題点は、いずれもパーソナリティの心理学では重要な意味をもつ論点であるが、それはすべてパーソナリティや性格の存在を前提とした上での考察であり論争であった。ところが近年 Mischel (1968) によって提起された疑問は、その

前提の当否にかかわるものであるだけでなく、そのほかにもわれわれにあらためて再検討を求める重要な論点を含むものであった。

Mischel がはじめに主張したことは、一般にパーソナリティ傾向とか特性とか呼ばれるものが、さまざまな状況を通じて個人の行動に一貫した特徴を与えるという見解は支持できないということである。個人の行動に一貫した特徴がみられるのは、個人の特性によるのではなく、むしろ状況 (situation) の類似性によるのではないかと考えたのである。

正確には、Mischel も個人の行動には、本人の個人的特徴が含まれることをまったく無視したわけではないが、上の主張は、パーソナリティそのものの存在に疑問を投げかけたものとして多大の反響をよび起したのである。

その後、Mischel (1973) は、多くの批判に含まれていた誤解をただすとともに、さらに進んで、具体的な提案を試み、個人的要因と状況との相互作用によって個人の行動を説明する立場を表明した。彼があげた個人的変数は、①認知や行動を生じ構成する力のあり方、②出来事や情報をコード化し処理する方略と個人的な構成概念、③刺激と行動の結果についての期待、④刺激についての好悪や評価、⑤自己調整の方式と計画のたて方の五種である。これらは、個人が社会生活のうちに学習した認知の仕方、個人個人で異なるものである。個人の行動はこれらの個人的変数と状況との相互作用によって生じると説くのである (堀毛 1989, 佐藤・渡辺 1992)。

Mischel の主張は大きな論議をひき起したが、とくに相互作用説は広く評価され支持された。しかし Mischel の主張の前提にも実は疑問があり、それはパーソナリティの研究上、重要な意味をもつので、順次それを検討したい。

(2) 個人的変数について

いわゆる個人的な変数は、個人が社会生活のうちに学習し形成したものであるが、その学習形成の前には個人的変数はなかったのかどうかはまず起る疑問である。

個人が誕生の当初から個性的存在であることについては多くの資料がある。パーソナリティを決

定するものとしては、社会的要因のほかに生物学的要因があることは多くの研究者が認めることである。たとえば、Stagner (1961) は遺伝をはじめ、中枢神経系、自律神経系、内分泌腺、および生化学的組成における持続的な個人差を指摘し、身体的側面においても平均人は存在しないことを強調した。人ははじめから、個性的存在として、この世に生まれ、環境に対処するものである。

Thomas と Chess (1963, 1980) らは、子どもの行動には発達の当初から個人差があることを明らかにし、行動特徴を9つの気質カテゴリーに整理した。彼らの狙いは気質という個人的な要因と社会的要因との関係を追究することであった。ある種の気質の子どもの行動と親の行動との相互関係と、いくつかの気質の一貫性についての資料は注目すべきものである (佐藤 1985)。

人間行動遺伝学の最近の発展も注目し値する。それは遺伝と環境との間の安易な相互作用説を批判し、遺伝を個性の源泉と認め、環境に対するその自立性を示す点で、遺伝的な個人的変数と環境との関係について新しい展望を開くものである (安藤 1992)。

いずれにしても Mischel が個人的変数を社会的な学習を経た人にだけ認めたことには疑問が残る。個人が発達のはじめから個性的なものでなければ、「個人的変数」が個人的特徴をもつことはあり得ないであろう。

(3) 情況について

Mischel 説の論評において Graumann (1975) が Lewin の考えに注目したのは、きわめて妥当であった。Lewin (1935, 1950) は $B = f(PE) = f(Lsp)$ とし、 Lsp (生活空間) を総体としての情況 (S) と表示したように、情況が心理学的に主体としての人から独立したものではなく、人と環境とのかかわり方から生じることを強調した。Koffka (1936) も同じような意味で、環境は心理学的には、地理学的環境ではなく、環境と自己とを両極にもつ行動的な環境または、心理物理的な場であるとしている。

このような環境観は生物学ではすでに Uexküll (1934, 1940) が提唱したものである。各種の動物

はそれぞれの種ごとに独自の境界をつくっているが、それはその生体の感知のあり方と作用のあり方に応じて現われるもので、どの種にも共通する環境一般は存在しないとするのである。これに近い着眼で状況の心理学的正確を示唆したのは、Endler and Magnusson (1976) である。彼らは状況についての心理学的研究の必要をとなえ、まず状況知覚の次元と状況反応の次元とをあげた。状況は生体の認知と対処行動との二つの契機からの関数として成り立つことを含意する点で、Uexküll の見解にも近く、十分に評価すべき発想であるが、状況が心理学的にはこの二つの次元をもつ全体的なもので、各個人の個人的特殊性に対応する存在であるとはとらえていない。

いずれにしても、Mischel のように、人と状況とを分離独立したものと考えること自体に問題があると言わなければならない。状況は個人と環境とのかかわり方から生れたので、人の行動は状況の関数とは言えるが、その状況はすでにその人が加工したもので、行動が人に依存するか状況に依存するかという設問は妥当性を欠くのである。

なお最近では、個人のもつ特性が状況を選択することを強調する見解も見られる（佐藤、渡辺 1992）。これも注目すべき指摘であるが、そこにはなお環境と状況との同一視が見られるようである。

ここでふたたび、Lewin の考え方にかえて言えば、パーソナリティ理論としては、彼は完全に「状況主義」の立場に立つものである。というのは、彼は人間の行動が状況内の人と他の事物や人（びと）との間の力学的関係によって左右され、行動にみられる一貫性もその力学的関係の同一性にもとづくと言っているからである。

Lewin (1950) は $E = f(P)$ であるとともに、 $P = f(E)$ であると記した。 $E = f(P)$ ということは、すでに述べたところでも明らかであるが、同じ程度で $P = f(E)$ とは考えられない。旅行、気象や身の激変で環境が短い時間内で大きく変わることはよくあり、それに伴って行動も大きく変わるのが常であるが、しかしそれとともに本人の主体的自我と中心的領域までがすぐさま変るとは限らないのである。

つぎに、環境および状況の行動に及ぼす影響がきわめて大きいという事実から、ただちに性格や特性などの存在を否定することができるとは考えられない。まず、環境に応じて行動が変わっても、その人の状況には変化がなく、つねに争いの場をつくったり、あるいは明るい場をかもし出したりするならば、そこに有力な個人的変数があるとみるべきであろう。もとより状況にもさまざまな種類があり、たとえば、幼児の状況は成人のそれとは全体として異なるが、共通的な幼児の状況にあっても個々の幼児は、その子の気質などに応じて個々別々な状況に住むのである。

さらに環境が大きく変わっても、その行動の変わり方の大小や遅速には著しい個人差があり、他方、環境はほとんど変らぬのに、行動の面で大きく変わる人もある。このような場合、そこに個人的変数を想定しないわけにはゆかないであろう。

パーソナリティや特性は、もともと環境や場が変れば行動もそれに応じて変ることが多いのに、それとは違う行動をする人が往々見られるという事実から想定されたのである。

環境の圧力が著しく強大であれば、大抵の人は同様な反動的行動をし、個人的な違いは現われにくい。その場合でも独自の行動をとる人は少数でもないわけではない。そして同じような行動をする人びとの行動の間にも細部では差異があり、感情や思考の心の動きにも違いがみられ、こうした個人的な差異のなかには、特性などの個人的変数によるものが含まれていると推定される。また環境的な刺激が不明確で曖昧であれば、本人の個人的変数を示唆する反応が現われやすいことは、投影法による研究で明らかにされているが、人に与えられる環境的刺激には一般に不明瞭あるいは多義的なものが少なくないことは注目に値する。

状況は人と環境とを含む生活空間であり一つの世界であり、そこで主体的な自我は認知や対処などの活動を営んでいる。その状況は個人によって異なり、その状況における認知や対処の仕方も個人によって異なり、その両方について、個人的な特性が認められることも稀ではない。リヤ王はその認知と対処の仕方ですら多くの苦悩の多い状況をつくった

が、その状況において自分を裏切った者に対して、はげしい抗議行動をくりひろげ、いたるところでその性格を際立たせた。われわれは、しばしば夢のなかである状況をつくることで、またその状況においてある認知や対処行動を営むことで、自分自身の性格を露呈するのである。

状況を考えれば、状況の主な種類に触れる必要がある。Lewin は対象との間に緊張のある状況と緊張のない状況とを区別した。具体的な生活に即して言えば、職場や公的場面と家庭や私的場面とが対比されよう。この二つの場面で同様な行動の仕方をする人は稀であろうが、比較的に一貫した行動の型を示す人はあり、一見まったく違う行動をとるときにも、内弁慶外味噌というように一つの特性を示す場合があることも見のがせないのである。

状況のもう一つの分け方は、対人関係を主な内容とするものと、仕事や課業との関係を内容とするものとの区別である。これらは人間の生活におけるきわめて重要な状況で、パーソナリティや特性もこの状況に即して明らかにされるのが常であり、情動や欲求の制御もこれらの状況に即して認められるのである。相互作用の観点から重要なものは、社会的状況と非社会的状況との区別であるが、これは次項にゆずる。

(4) 相互作用について

相互作用とは、ここでは、生体または人とその「状況」との間に相互に影響を与えあうことで、Mischel の文脈では、個人の行動にみられる一貫性はこの相互作用から説明されるとするのである。この考え方は今日でも一般に広く支持されているが、しかしここにもなお検討を要するいくつかの問題点がある。状況が人の関数であることはこの項でも注意しておきたい。

① まず注目されることは、環境および状況が社会的である場合と非社会的なものであるときとは、相互作用の意味が一様でないことである。家庭という社会的状況では、その人と他の者との間に相互作用があることは明らかであり、個人の行動はその相互作用が変らなければ一貫性を保つであろう。

しかし自然や文化などの非社会的環境および状況については、人と非人間との間に、人と人との間に見られるような相互作用があるとはいえない。個人の行動はたしかに周囲の事物や出来事によって影響され、個人は事物や状況に影響を及ぼすが、個人の働きかけと事物の影響とは同じ性質のものではない。事物の影響はそれを受ける個人の側の事情・条件で大きく変る。‘谿声山色’が悟りを開かせたという事例はあるが、それはその個人の到達した状況内の谿声山色であって、川の音や山の色そのものが人間と同じ種類の作用をもつわけではない。自然や事物の影響や作用は個人によって認知的に加工された自然や事物の影響効果であって、Endler & Magnusson も言うように、作用主体である個人の側の働きを認めなければならない。したがって、そこに行動の一貫性が見られても、それを人と状況との相互作用によるとするのは必ずしも適切ではないのである。

② このような次第で、状況そのものは個人の認知と対処の仕方で大きく変りうるものであり、従ってその状況と人との相互的な関係もまた変りうるものである。そこで、その状況があまり変らぬ人については行動にも比較的に一貫性がよく認められ、状況が変る人については認められないことになる。しかしながら、つぎつぎと親和的状況をつくる人は、その点について一貫性をもち、長く同じような状況にとどまる人はまた、その点で一貫性をもつわけである。

③ さかのぼって考えれば、パーソナリティの心理学において行動の一貫性をあまりに重くとりあげることには疑問があると言える。このことはすでに Graumann が注意したことで、彼はここで問われるのは行動の一貫性ではなく、特性の一貫性であることを指摘した。R. B. Cattell が根源的特性を説くときにとくに強調したこともある。個人は、年齢が加わったり、生活場面が変れば、多少ともあい異なる行動をするが、それでも特性水準では一貫性が認められることが少なくないのである。著しく違う二つの行動が同一の特性から生じることもあれば、逆に同じような行動が互いに異なる特性から生じることもある。

(5) エージングの心理学からの示唆

パーソナリティや特性が「状況」の変化にもかかわらず一貫性を保つかどうかについて決定的な意義をもつのは、老年期の心理についての研究である。老年期になれば、一般に体力も衰え、職業や公的生活から身をひくなどで生活環境や状況に大きな変化をみるので、老年期における特性等の変化の有無についての研究は上の問題の解決にもっとも有力な資料を提供するからである。

この点についての多くの研究の結果は大きく次の3種に分けられる。①高年になれば性格の上である変化があらわれる。②高年者の行動に変化が生じたように見えても、それは加齢に伴う状況の変化に対する反応的变化で、性格特性の変化とは認められない。③性格特性等は高年によって変化することのない安定性をもっている。

このうち②は、状況の変化の影響を認めるが、それは行動面に及ぼす影響で、性格や特性には及ばないことを意味する。全体としては、③がもっとも有力な見解であり、補足的に高年者に内向的な態度が増すという点で①の傾向が指摘されるのである。

加齢の研究では、縦断的研究が高く評価されるが、その種の米独の大規模な研究では、加齢による性格の変化を立証したものはなく、むしろ老人達は以前からの安定した性格や特性を保持しそれをもって様々な人生の出来事や身上や生活条件の大きな変化に対応しているのである (Siegler 1987, 下仲 1984)。

老年に入ってから社会的活動や自発性が低下したと見えることはあっても、それは、反応的な変化である。老年期には、内向的な傾向を増すという知見は有力である。やや古くは、Jung や Erikson がとなえ、近くは Neugarten (1977) らが、多くの資料でこの傾向をたしかめている。しかしこの傾向も、社会的に狭い生活圏に入った老人の反応的な変化とも考えられ、性格的变化と考えてよいかどうかには疑問がある。いずれにしても、身上や身辺の大きな変化に比較すれば、比較的軽い変化にとどまるのである。状況に重点をおけば、身上身辺の大きな変化にもかかわらず、状況にはそれほ

どの変化はなかったのだと考えられる。老年になって女性が能動的・男性的に、男性が受動的に変わるという報告も見られるが、こうした変化も老年における男女の社会的立場や役割の変化に伴うものではないかと解釈されるのである (下仲 1984)。

ここで、とくにつけ加えたいのは、老人の自己観についての多くの報告を吟味し総括した Bergstein (1988) らの研究である。彼らはパーソナリティの一面としての自己観 (Self-conceptions) に関する約 200 編の論文を検討し、そのなかで信頼のおける 62 編の結果を総括して 15 の仮設的な命題にまとめた。自己観というのは、自己と認知された内容、その評価、さらにその確認・防衛・増強・自己実現への意欲を含む自己に対する態度である。その総括の主なものをあげれば、気質に密接につながる特徴とくに幸福感、安全感、適応性、社会性などでは高い安定性がみられること、ついで自己主張、自己制御、敵対性、経験受容性なども安定度が高く、内向性・外向性と神経症的傾向にも成人期以降ではかなりの安定度があり、さらに自己尊重では年齢差がないか高年になって上昇するかであることであった。ただ一つ、社会的責任性は老年になって中程度に低下したが、これは、老人の社会的役割の低減に応ずる変化とみられる。全体的には、老年に入っても性格特性はほとんど変ることがないといえるのである。

要するに、老人のついでの研究によれば、身体的条件や社会的な生活条件は変っても、性格的な特徴には高い程度で安定性が認められると言えるのである。

しかし老人にみられる特性の安定性から、ただちに青少年を含む人びとの特性の安定性を主張するのは早急というべきであろう。青年期の終るまでは、むしろパーソナリティの形成の時期であると思われるので、それまでは状況によって影響される行動が多くあり、そのある行動の型が個人的な傾向として保存され、他のある行動の型は一過的なものとしてすてられると考えられるのである。従って、パーソナリティの形成の終る前には、行動の多くは状況によって左右されることが多く、その後も状況の激変でパーソナリティや特性の変

化の可能性はあると考えられる。

パーソナリティへの接近法（試論）

ここまで述べたところを土台にしてパーソナリティ（性格）心理学のあり方について考えたい。個人の行動がその人の関数としての状況における行動であるという事実から、その人のパーソナリティや特性を知る作業には2つの段階があることがわかる。①その人の状況、その人がいま住んでいる境界や世界がどんなものかを明らかにする段階と②その状況における行動のなかに本人独自の行動パターンあるいは一貫的な特性を見出す段階とである。

（１）個人の状況を明らかにする段階

個性的存在としての個人は、それぞれその認知の仕方と対処の能力に応じて形成された状況世界に住み、それに即応した行動を営んでいる。躁状態の人と鬱状態の人とはそれぞれ別の状況に生きている。この世は食うか食われるかで、油断もすきもないところと考える人と、持ちつ持たれつの世で、渡る世間に鬼はないと思っている人とは別々の状況世界に住み、それに対応する行動をとる。ある状況に住む人にとっては当然と思われる行動も、他の状況にある人や局外者によっては、しばしば思いもよらぬものであり、変った行動と見えるが、そのすべてを個性的な行動とみることはできない。

それ故に、個人の行動にみられる個人的な特徴を明らかにするためには、まず本人の住む状況世界を知らなければならない。それは、本人の環境認知の仕方と対処の仕方によって決定される。その主観的世界としての状況がどのようなものかは、本人の言動を手掛かりにして内的接近法によって理解するしかないが、その状況は他の状況との比較ではじめて明らかにするところもあるので、第三者の外的接近法もまた必要である。躁や鬱の状態の人の状況は本人に聴かなければわからない面もあるが、精神医学者の観察で明らかにされた面も少なくないのである。

個人の関数としての状況は、規模によって大小の区別があり、時間的には長期的なものもあれば、

短期的なものもあり、全体的状況もあれば、部分的情况もある。客観的な事態に比較的近い状況があるとともに、主観的な色彩の濃い状況もある。

大状況とか全体的状況とかがはっきりと認められる場合にもその細部には多くの変化があるが、それは大きな川のなかの波のようなもので、全体が澄んでいれば、部分も澄んでおり、全体が濁っていれば、部分もその色合いをおびているのである。

性格心理学の大きな流れの一つは、個人がどんな状況世界のなかにいるかを見ようとするものである。Kretschmerの性格学やJungの類型論はその代表的なものである。MMPIやMPIから得られる資料は多分に本人の状況世界についての情報であり、各種の投影法からの資料にはそれについてのとくに多くの情報が含まれているのである。

個人が含まれる全体的状況が、たとえば病理的な場合のように、きわめて強力に個人の生活を左右し支配するようなときには、それを明らかにするだけで、その人のパーソナリティや特性の主要な特徴をとらえたと言える。たとえば、顕著な躁鬱的な傾向をもつ人では、生活上のさまざまな部分的情况でも、行動でも、ことごとくその個人の躁鬱の循環という大河のなかの大小の波として理解できるからである。

しかし、ある特定の全体的状況が、長期にわたって支配的である場合よりは、ある状況がやがて別の状況に代る場合が多いだろうが、当然、それも明らかにする必要がある。また全体的状況が強力・鮮明ではない場合も少なくないであろうが、その場合には、その時どきの部分的な状況の意義がそれだけ大きいことになるであろう。

さらに、どういう状況の場合にも、個人の行動のあり方をみなければ、性格や特性をとらえることはできない。Kretschmerはゲーテを躁鬱的な気質の人と認めたが、そうしたゲーテの全体的状況をとりえても、その生活におけるさまざまな行跡すなわち行動の特徴を追究しなければ、彼の個性的なパーソナリティを明らかにしたことはならないのである。

（２）個人の行動の特徴を明らかにする段階

人はそれぞれ個人的な情況世界のなかでさまざまな生活活動を営んでいるが、そこからその人の個性的特徴を読みとるには、個々の断片的な動作ではなく、具体的な生活場面におけるまとまりある一連の行動すなわちエピソードまたは逸話をとらえなければならない。個々の断片的な行動のなかに、「粘り強く、親切、明朗で、落着きのある」傾向をよみとつても、それは類型的なくくり方で、個性的特徴をとらえることはできない。それぞれの項目に具体例が示されることで、はじめて個性的特徴が体験的に了解されるのである（北村 1992）。

Murray はエピソードをその人のもつ諸欲求とプラス・マイナスの圧力との関係から生じる主題 (thema) と名づけた。われわれがよく知っている人について個性的な性格特徴を感じ知るのには、その人の情況とともに、さまざまなエピソードやテーマを知り、そのなかに一貫的または、斉一的な特徴をよみとるからである。テーマには、当面の短期的なものもあれば、長期的なものもある。長期の生涯にわたるテーマが青年期前から明確である場合は稀であろう。生涯のテーマは、多くの場合、はじめは漠然として、大体の志向を示す程度で、いくつかの試行的な短期テーマの進行のうちに、次第にはっきりしたものになるのである。

Murray は、重要な衝動（要求）と重要な圧力の数には限りがあるからテーマの数はそれより多いが、やはり限られていると述べている (Murray 1938)。しかし個性的特徴を語るのには、言語的・概念的に示されるテーマというより、具体的なエピソードあるいは例話である。

エピソードや逸話の形をとるまとまりある生活活動には、たんにテーマがあるだけでなく、圧力としての条件のもとで要求を達成する際の方法や技能が含まれる。Thomae (1955, 1968) はこの点を重視して、生存の主題とならんで生存の技術 (Daseinstechnik) をあげた。生活または人生の主題には、かならず、それを実現するための技術や技能が伴うからである。生存の技術には、各種の作業遂行のためのもの、適応の仕方、防衛の技法、緊張の場から逃れ出すこと（逃避を含む）および

攻撃が含まれる。このような社会生活に対処するために身につけた技術や技能にも個人の個性的特徴がみとめられるのである。

個人のパーソナリティや性格を知るためには、その人の情況を知るとともに、エピソードの形で、生存の主題と生存の技術の特徴をとらえることが必要になるのである。それとともに、人間の生活からみて、社会また人に対する行動のあり方、自分の仕事また用務や責務に関する行動のあり方、自分の欲望や感情や意識内容に対する認知と対処行動のあり方をエピソードの形でとらえることが求められる。

今日まで、性格特性をとらえるものとして提唱された多くの技法やテストは、上に述べた諸側面のどれかに焦点を合わせたものになっていて、すべての領域にわたるものではない。その上、そこで得られた結果は、いくつかの類型または、順位的または統計的に位置づけられることによって、個性的特徴が見失われるのが常である。その際に、テスト中の態度や面接や行動観察や伝記的資料によって、その結果に該当する小エピソードを示すことができれば、その結果は、格段によく個人的特徴を示すことになる。テスト等によって、何人かの被験者に「粘り強い」とか「明朗」とかの特性が認められたとしても、それだけでは個人的な特徴は明瞭にされない。そのときに、その人びとの実際の生活活動にみられる「粘り強さ」とか「明朗」とかのエピソードが添えられれば、そこに必ず個人的な特徴があらわれるのである。なお、単一事例研究法を含む個性記述的方法の新しい展開にも期待がよせられる (Runyan 1983, 田中 1988)。

そのエピソードの数についてはなお考える必要があるが、個人的特徴が明確な特性であれば、各特性について2, 3例で足りるかも知れない。エピソードや逸話で個人のパーソナリティをとらえる場合には、生存の主題と技術をはじめとして、上述の三領域ごとに、人生の主要な時期ごとに、少なくとも3つ程度の例話を必要とするであろう。この場合には、環境的な事情を本人の情況となった姿として明らかにすべきことは言うまでもない。

終りにつけ加えて強調したいことがある。われわれが他の人のパーソナリティについて知りうることは、つねにその全体の一部であり、また確実な知識と思う場合にも、実際には暫定的なものであり、仮説的なところを含むものと考えなければならない。

Jaspers (1948) が言うように、パーソナリティの全体、あるいは個性を全体として認識することはできない。それ故、知り得たものがつねに部分的なものであることをわきまえるとともに、少なくとも他の部分的なものとの関係を示し、できれば全体と仮定されるものとの関係を示唆することが望ましい。この意味でまた、性格特性を本人の全体的状況との関係でとらえることの必要性が知られるであろう。

パーソナリティの二段階接近法の順序は、状況から行動の仕方への順となるが、目的や事情によってはその逆でもよいであろう。具体的な方法については、後の機会にゆずりたい。

終りに、パーソナリティの追究で得られた知識は一般に部分的であり、時間的には現在の時点までに限られたものであるので、厳密には暫定的なものとしてつねに補正を必要とするものである。しかし限定されたものではあるが、その知識に価値や意味がないわけではない。当面の目的や必要をみたすものであるならば、それなりの有用性をもち、またその検討や補正によってさらに確実な広い知識を産み出す資料ともなるからである。

本稿は、第四回性格心理学研究会（1981年）において述べた内容に補足を加え、若干の展開を試みたものである。

引用文献

- Allport, G. W. 1937 *Personality : A psychological interpretation*. Constable.
(詫摩他訳 1982 パーソナリティ 新曜社)
- Allport, G. W. 1955 *Becoming*. Yale University Press.
(豊沢訳 1959 人間の形成 理想社)
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. Hold, Rinehart & Winston.
(今田監訳 1968 人格心理学上, 下 誠信書房)
- 安藤寿康 1992 人間行動遺伝学と教育 教育心理学研究, 40, 96-107.
- Bengtson, V. L., Rees, M. N. & Gordon, C. 1985 *Aging and Self-Conceptions : personality process and social contexts*. In J. E. Birren & K. W. Schaie (Eds) *Handbook of the psychology of aging* 3. Edition. Van Nostrand Reinhold.
- Endler, N. S. & Magnusson, D. 1976 *Toward an interactional psychology of personality* *Psychological Bulletin*. 83, 956-974.
- Graumann, L. C. 1975 *Person und Situation*. In U. Lehr und F. E. Weinert (Hrsg) *Entwicklung und Persönlichkeit*. Kohlhammer. 15-24.
- 堀毛一也 1989 社会的行動とパーソナリティ 大坊・安藤・池田(編) 社会心理学パースペクティブ I 誠信書房 207-232.
- Jaspers, K. 1948 *Allgemeine Psychopathologie* 5. Auflage.
(内村他訳 1955 精神病理学総論 中巻, 下巻 岩波書店)
- 北村晴朗 1983 希望の心理 金子書房
- 北村晴朗 1991 自我の心理・続考 川島書店
- 河野与一(訳) 1951 ライブニッツ単子論 岩波文庫
- Koffka, K. 1935 *Principles of Gestalt psychology*. Harcourt.
- Lewin, K. 1936 *Principles of topological psychology*. McGraw-Hill.
(外林・松村訳 1942 トポロジー心理学の原理 生活社)
- Lewin, K. 1950 *Field theory in social science*. Harper Brothers.
(猪股訳 1956 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Mischel, W. 1968 *Personality and assesment*. Wiley.
(詫摩監訳 1992 パーソナリティの理論 誠信書房)
- Mischel, W. 1972 *Toward a cognitive social learning reconceptualization of personality*. *Psychological Review*, 80, 252-283.
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in personality*. Oxford University Press.
(外林訳 1962 パーソナリティ I, II 誠信書房)
- Neugarten, B. L. 1977 *personality and aging*. In J. E. Birren and K. W. Schaie (Eds) *Handbook of the psychology of aging*. Van Nostrand Reinhold. 626-649.

- Runyan, W. M. 1983 Idiographic goals and methods in the study of lives. *Journal of Personality*, **51**, 413-437.
- 佐藤達也・渡辺芳之 1992 「人か状況か論争」その後のパーソナリティ心理学 東京都立大学人文学報, **231**, 91-114.
- 佐藤俊昭 1985 子どもの気質の追跡研究一序報一 東北大学教養部紀要, **43**, 171-751.
- Siegler, L. C. 1987 Personality. In G. L. Maddox (Ed.) *The encyclopedia of aging*. Springer. 520.
- Snygg, D. and Combs, A. W. 1949 Individual behavior. Haper & Row.
- Stagner, R. 1961 Psychology of personality 3. edition. McGraw-Hill.
- 下仲順子 1984 加齢と人格 心理学評論, **27**, 260-271.
- 田中潜次郎 1988 単一事例実験の方法論的問題 医事学研究(岩手医科大学), **3**, 139-270.
- Thomae, H. 1955 Persönlichkeit : Eine dynamische Interpretation 2. Auflage. Bouvier.
- Thomae, H. 1968 Das Individuum und seine Welt : Eine Persönlichkeitstheorie Verlag für Psychologie. Hogrefe.
- Thomas, A., Chess, S. et al. 1963 Behavioral individuality in early childhood. New York University Press.
- Thomas, A. & Chess, S. 1980 The dynamics of psychological development. Bruner / Mazd.
- Uexküll, J. von und Kriszt, G. 1934 Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen Bedeutungslehre. Fischer.
(日高・野田訳 1973 生物から見た世界 思索社)
- Windelband, W. 1894 Geschichte und Naturwissenschaft.
(篠田訳 1929 歴史と自然科学, 岩波文庫)